

## 第12回大会報告

三木 愛

JASMIM に所属して2年目になる私にとって、今回が初めての大会参加である。どんなバックグラウンドを持つ人がこの学会に所属しているのか、興味があった。「音楽即興」に関心のある人たちが集まっているのだろう、という判りやすいヒントから想像して、この学会に入会した。私自身の即興活動は、JAZZ ピアノの研鑽と、サンスクリットマントラの音を使った瞑想の指導である。

コロナ禍で、オンライン開催される今回。これは、私にとって、参加の大きな決め手となった。仕事が立て込んでいても、東京の自宅からいつでも入室可能なことは、参加しやすい条件である。ところどころの参加にはなったが、学会の雰囲気、そして会員それぞれの興味関心事が知れたことは、今回の大きな収穫である。

参加者は、大学機関の研究者や教授、小学校の教師など、指導者が多かった。その中で出てきた話題、「コロナ禍の音楽教育」について、興味を引かれた。ある小学校の音楽教師の言葉、”今年度は、子ども達は日頃から歌う機会が少なくなり、音楽をクラスで作り上げる機会が減った。その分、打楽器を使用しての即興的な音楽をする機会は多くなった。”とのこと。

「クラスで作り上げる音楽」は、クラスのキャラクターの違いによる、表現の工夫や洗練さのことだろう。ここへの時間をかけることは減っている。一方、「即興的な音楽」は増え、その場でリズムを作り楽しむ事は増えた。コロナ禍では、今までの表現重視型から、創作型に重きを置くスタイルになっているようだ。

さて、ここで私たち大人は、即興音楽指導を通じて、子ども達に何を与えられるだろう。子ども達は、何を得られるだろう。突き詰めると、「創造する喜び」である事は間違いないが、初めての即興で、すぐに喜びを得られる事は難しい。私も、初めてのJAZZセッションでは、楽しむどころか、頭の中が真っ白になったのを覚えている。”自由に。”と言われ、自由にできない経験をした事は、誰しもあるだろう。人は、ある枠の中でなら、自由に動ける。

私は、自由に創作し演奏する楽しさを、伝えたい。「今この自分」と繋がって、今の感情や思考を表現すること、即ち、即興を楽しむことを、伝えたい。

そのためのヒントが、私の研究実践しているもう一つの分野、サンスクリットマントラに隠されているように思える。サンスクリットはインドの古代語である。文字はなく、口伝で伝えられる。その言葉の意味を知らなくても、音が美しく、聞く人、唱える人、共に心地よく癒し、音の持つ力を感じられる。自身の内側の力を溢れさせる言語だ。マントラをただ唱える他に、メロディを付け、歌に乗せる方法もある。マントラは決まっているが、メロディの付いたインド音楽は即興的な音楽だ。モチーフは決まっているが、メロディは変化可能な

のである。何かを固定して、他の部分を変えていく事は、即興のしやすさに繋がる。

子どもの場合は、「しぼりしりとり」のように即興のテーマを決めて、あとは自由にゲーム感覚で展開していくと、枠の中でどんどん自由に創作できるのではないか。自由を手放さずにリズムやメロディを創作する事は楽しく、今ここの自分と空間とを表現したものになる。

創造・表現技術は、継続することによって必ず洗練されていく。

創造する喜びを定期的な音楽の授業で感じ、自分の中を表現する術を磨いて行けたら、これからの未来、若い生命は音楽以外のステージでも何かを見つけ育み、その都度、自分の心に寄り添いながら感じ、考え、人生を輝かせるマイルールを作っていけるのではないかと、大げさではなく思う。